



TITLE:

<報告>小田芳郎君の助手新任にあ
たって

AUTHOR(S):

前川, 暢夫

CITATION:

前川, 暢夫. <報告>小田芳郎君の助手新任にあたって. 京都大学結核胸部
疾患研究所紀要 1974, 7(2): 170-170

ISSUE DATE:

1974-03-30

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/52255>

RIGHT:

報 告

小田芳郎君の助手新任にあたって

内科学第1

前 川 暢 夫

小田芳郎君は昭和16年9月4日の生れで、大分県竹田の産と聞いている。この地、岡城跡は久住山を北に見て、多感な少年時代を過した滝廉太郎が「荒城の月」の曲想を得た所と言われている。その後、大阪に移って、昭和35年に大阪府立住吉高校を卒業、昭和43年9月に京都大学医学部医学科を卒業している。同年10月から私共の研究所の内科第一の研究室で、主として抗結核剤のスクリーニングに関する基礎的な研究に従事していたが、昭和46年3月から大阪通信病院第一内科医員として一般内科の勉強をし、昭和47年10月から天理よろづ相談所病院呼吸器内科に移って臨床の腕をみがいていた。

大学紛争のさなかに卒業した同君が大学の内

外から「大学」のあり方を見つめる姿勢には、私共に多くの共感を呼ぶものがあった。

今回、中井 準君が神戸中央市民病院へ転出されたあと、所定の手続を経て昭和48年12月1日付で助手となったが、生来の健康と強固な意志、明朗な資性をそのままに胸部疾患の臨床的研究に注ぎこんで、大成されることを期待している。

大型で、スポーツ万能、豪快に酒を楽しむかげに細心の計画性と整理力を秘めている。私の注文は、若い間にはもう少し無駄があってもよいのではないかと言う点である。

生地の名産と聞くカボスの果実のように豊かに熟することを望んでやまない。